

健康のしおり

皆さんの健康のお役に立つように、このようなパンフレットをつくりました。
是非ご覧下さい。

港南区医師会

横浜市港南区港南中央通7-29

電話842-8806

港南区医師会休日急患診療所

診療日 日・祭・年末年始

診療時間 午前10時～午後4時まで

電話 842-8806

ところ 鎌倉街道 バス停 吉原
横浜市港南スポーツセンター前

下血と大腸

下血は肛門の病気が原因とは限りません

下血（おしりからの出血）という、多くの方は、まず痔核（いぼ痔）や裂肛（切れ痔）といった肛門の病気を、まっさきに思い浮かべると思います。

ところが、下血をおこす病気には、大腸の病気の原因であることも少なくなく、そのなかには腹痛などの症状をとまなわない疾患も多く、痔と誤って、診断・治療が遅れてしまうと重篤となることもあります。大腸癌をはじめとする腫瘍性病変や炎症、血管の病気なども原因となることがあります。そして、その出血の色や量だけでは、痔の出血と区別することが難しいことも多く、慎重な対応が必要な場合があります。（いわゆる「まっかな鮮血」や「紙に付着するような出血」でも大腸疾患が原因であることがあります。）今回は、痔と間違われやすい大腸の病気を御紹介します。

まず大腸癌ですが、近年、我が国でも増加傾向にあり、その死亡率は、近年、男性で肺癌・胃癌についで第3番目、女性では1番目（子宮癌や乳癌より高率）なのです。そして、この大腸癌のほとんどは大腸ポリープ（良性腺腫）から発生することがわかっており、その初発症状は下血がほとんどです。（健診での便潜血反応は、肉眼ではわからない出血もとらえようとした検査です。）もし、この大腸ポリープのうちに治療できれば、大腸癌のほとんどを防ぐことができるわけです。その大腸ポリープや早期の大腸癌の大部分は、大腸内視鏡といったカメラによる治療で治すことができますが、大腸癌が進んでしまった場合には、開腹手術等を要することも多くなり進行とともに重篤となるため、早期の発見が望まれます。また一方、ポリープや癌でも、症状がでないこともあり（便潜血反応も陽性にならないことがあります）、ある程度の年齢（40歳程度）を超えたら

一度は、大腸内視鏡をはじめとする大腸の精密検査をお受けになることをお勧めします。実際に、一生のうち一度でも大腸内視鏡を受けた場合、大腸癌死亡率が減少するというデータも出てきています。

次に、大腸の炎症の場合ですが、いわゆる出血性大腸炎の多くは、腹痛や下痢を伴うことが多く、「腸に原因がある」と気付きやすいと思います。それらのなかで注意すべき疾患としてまず、潰瘍性大腸炎があります。潰瘍性大腸炎は若い方でも発症する慢性の腸炎で、大腸全体が炎症をおこす場合と一部が炎症を起こす場合があります。大腸全体が炎症を起こす場合は、下痢・腹痛を伴うことが多いのですが一部だけの炎症の場合出血と粘液の排出だけでなく痔の症状と類似のことがあります。注意が必要です。

潰瘍性大腸炎は、適切な治療を行わないと重症化したり長期経過例では癌化することもあり的確な診断・治療が必要です。

次に最近増加傾向にあり注意すべきものとして、アメーバ腸炎があります。赤痢アメーバの感染により起こる腸炎ですが、症状が継続する少量の下血だけであることがあります。最近、性行為感染症としても注目されており、効果の期待できる抗生剤が限られ重症化・遷延化することもあり、また糞便を介して感染することから、注意が必要です。

また、大腸憩室（大腸の壁のくぼみ）から、突然出血をおこすことがあり、この場合、一度に多量の下血をきたし、急激に貧血が進行することがあり、早期の診断・治療が必要となりますが、通常、腹痛を伴わないため、痔の出血と考えて様子を見てしまうことがあるようです。

このように、下血をおこした場合、「痔の出血」と思いこまずに、まず専門医に御相談されることをお勧め致します。